
境界散歩

人鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

境界散歩

【Nコード】

N4507L

【作者名】

人鳥

【あらすじ】

彼は歩く、境界に沿って。一人の旅人の、孤独な旅物語。

1 本目（前書き）

とあるflashhサイトを見て、どうにか文章化できないかと書き上げた作品です。

第一部の『一本目』がそれにあたり、以降はそこからの派生となっています。

何かひとつでも思うことがあればうれしいです。

1 本目

私は正直、そこに辿り着いたことを後悔した。人の姿など見えず、まるで自分ひとりが世界から孤立したかのような錯覚にとらわれてしまったからだ。いや、もしこの時、植物でも見つけていたとするのなら、私はそんな気持ちにはならなかったのに違いない。

ともあれ、辿り着いてしまったからには仕方がない。冒険者であり、旅人である私だ。こここのことを知りたい。

知りたい。

ここが一体どんな場所なのか、を。世界に無為なものなど存在しないのだから。この真っ白で、ただただ無為に広がっているかのようない気持ちにさせられるこの場所にも、何らかの意味が、意義があるはずなのだ。

さて、一体どうしようか。私は早くも困り果てていた。だってそうだろう？ 誰も、何も、ありとあらゆる有象無象が存在しないのだから。あるのは、空に燦燦と輝く太陽と、果てしなく続く白い大地だけ。そう、私はこの地を去る方法すら思い浮かばないのだ。辿り着いた方法すら、なぜか思い出すことができない。困り果てた私の目に、信じられないものが映った。否、私はそれが何なのか、知っている。誰もが知っている。

一本の黒い線が、白い大地に引かれていた。

そこで区切るかのように。

そこを境界線とするかのように。

世界の境界と定義するかのごとく。

一本の黒い線が引かれていた。

私は、その黒い線を越える勇気がなかった。超えてしまえば、あるいは私はこの地を離れることが叶うのかもしれない。けれど、私はその境界線と見られる黒い線を、越える勇気がわいてこなかった。私はその職業上（旅人や冒険者をそう呼べるのなら）、様々な国を、

地域を、世界を旅しているが、こんな気持ちにさせられたのは初めてだ。これならまだ、冷やかな目で私を見つめる村人のほうがマシだ。

私は、その黒い線の伸びる先を見た。方角は見当もつかないが、今私が向いている方向を北と仮定した場合に、その線は東西に伸びていた。それも、限りなく長く。東西、どちらを見ても、かなり長い。長い。終わりが見えないのだ。まさに、国境のごとき線である。この地で見た白以外のものは、線だった。生き物ですらない。まあ、いい。とりあえず、この線に沿って歩いてみることにしよう。境界線に沿って歩くのも、悪くはない。

と、半ば嬉々とした面持ちで、心持で歩いていたのだが、どうしても視界が退屈してしまう。黒い線。白い大地。それだけである。空を見上げると、白い空が広がり、燦燦と、少しだけ赤みを帯びた太陽が輝いている。太陽かどうかも疑わしいが、それを疑ってしまったのは、私は人間的に敗北したことになるだろう。それだけのご免だ。そんな自尊心を破壊され、羞恥心が掻き立てられる敗北など、完全に拒否する。

何も無い。私は何度もそう記しているが、心の半分くらいでは、それはありえないと高をくくっていた。木も水もないなど、考えられないからだ。けれど、何もなかった。完璧に、完膚なきまでに何もなかった。酸素やその他の生態活動に必要な要素は、一体どうなっているのだろうか。気になる限りだが、しかし、私はそれよりも、この黒い線の実態を知る必要がある。

黒い線。

それはどこまで行っても、黒い線以外の何物でもなかった。直線である。本来の意味での直線である。どこまでも続いている。分線なんてものじゃない。きつと、この地を一周して繋がっているのに違いがない。そうでないのなら、私は進んでいないのか。進んでいないと思っただけで、一步も進んでいないのか。否、そんなはずがない。ありえないのだ。なぜなら、私の足はこうして前進しよう

と歩んでいるのだから。相対性理論を、私は自分自身で持って、体感し理解してしまった。否、それはいい。実にいい。諸手を挙げて喜ぼう。歓喜狂乱演舞を舞ってもいい。ただ、今、この状況だけは嘆かわしいだけだ。一体、私はどこへ向かっているのだろう。いやはや、困ったものだ。始めの嬉々とした気持ちは消え失せ、私は焦りを感じていた。こんな場所で終わるかもしれないと感じたからだ。そうはならないと言いついても、心はそれを打ち消してしまう。黒い線は相も変わらずそこに存在し続け、その存在が途切れることはない。

そろそろ、行動のときだろうか。

さすがの私でも、少々ばかり疲れが生じてきた。それがどうしたというわけじゃない。疲れには慣れている。けれど、この手の不安には慣れていない。ただ、それだけだ。

今の状況をあらゆる面で前向きに捉える、そういう考え方を私は会得した。それは、かなりの快挙であり、境界散歩を続ける私には救世主が降臨したかのごとき進化であった。

境界散歩を始めて、どれほどの時間が経った頃だろうか。私は一つ、ある勇気が芽生えた。行動する勇気である。私は無意識のうちに、黒い線を見つめていた。

飛び越えてしまおうか。

絶対的に何かが変わってしまいそうな気がする、それをする事によって。けれど、私はきつとそれをせねばならないのだろう。否、ならないこともないのだが、飛び越えるという、ある種欲求めいたものが私を支配しようとしていた。

私はとうとう、その黒い線と対峙した。境界散歩を始めてから、初めての事だった。黒い線は、やはり、相も変わらず白い大地をその身でもって二分している。

私はついに、振り絞り、絞りつくした勇気でもって、その黒い線を 飛び越えた。

けれど。

けれど、何も変わらなかった。景色も、空気も、勿論、白い大地も黒い線も。何一つとして、変化することはなかった。強いて言うのであれば、私の心境は変わっただろう。

それはどうでもいい。いいのだ。問題なのは、その呆気なき加減だろう。この黒い線は、一体、何の境界線なのが不明瞭だ。今実感したのは、決して世界を分割しているわけではないということだ。もしそうなら、今頃この景色は完全に変貌を遂げているはずである。そうでなくとも、何らかのアクションが起きているはずなのだ。しかし、それが無い。では、一体何の境界線なのか。と、そこで、頭に激震が走った。とんでもない勘違いをしていたことに気付いたのだ。

この黒い線は、境界線などではなかったのだ。境界線などではなく、この世界を構築する、要素の一つでしかなかったのだ。境界線などと、この黒い線を称するのは愚の骨頂なのだ。私はとんでもない間違いを、思い違いをしていたようだ。

気付いた。思い至ったというべきかもしれない。

本当の境界線は目に見えない、ということに。

2 本目（前書き）

何かを決めるのは、やはり自分だけでしかないのかもしれないかもしれません。

2 本目

私は正直、そこに辿り着いたことを、後悔した。人の姿など見えず、まるで自分ひとりだけが世界から孤立したかのような錯覚にとらわれてしまったからだ。いや、もしこの時、植物でも見つけていたとするのなら、私はそんな気持ちにはならなかったのに違いない。

ともあれ、辿り着いてしまったからには仕方がない。冒険者であり、旅人である私だ。これからのことを考えなくてはなるまい。

当然、このままこのような何も無い、寂しげな土地で命の炎を消してしまつつもりは毛頭ない。全然全く、これっぽっちもない。

私はとりあえず、この黒い境界線のようなものに沿って歩くことにした。言うなれば《境界散歩》と言ったところか、否、そんなことはどうでもいい。どうでもいいのである。問題なのは、私がどのような手段でもって、この地に辿り着いたのが不明であることだ。辿り着いた方法が不明ならば、帰る方法も不明である。途方に暮れる、五里霧中、とはこういうことを指すのかもしれない。否、これ以外には有り得ない。有り得ないのである。なぜなら、私の今の脳内は完全に霞がかかったかのごとく、曖昧模糊としていて、自分でも整理のできない状況だからだ。

真つ白な世界は、それだけで私の心を虚無感に貶めた。何も無いことは、それだけで苦痛だった。退屈は死の病というのも、あながち嘘ではなさそうだ。私はこうして境界線に沿って歩いているが、その境界線はずっと先まで続いている。一寸たりとも途切れる事無く、恐らくケンピキョウという奇怪な道具を用いたところで、途切れている部分は見つからないだろう。それほどまでに、この黒い線の太さは一定で、濃さも一定だった。

ちなみに、私はまだ私以外の生物を見かけていない。あらゆる意味で見かけていない。肉眼で見ることのできるあらゆる生物を見ていない。人は当然。鳥も獣も、虫すらも。何一つとして見ていない。

これでは不安になってしまっではないか。数多の国々を巡った旅人である私が、この程度のことでするわけにはいかない。何としてでも、この場から脱さなくてはならない。

一つ、高い音が聞えて私はそちらを見た。しかし、そこには何も居らず、よくよく考えてみれば、あまりの静けさによって引き起こされた私の耳鳴りだった。「耳鳴りがするくらいの静けさ」とは、よく聞く比喩であるが、まさか本当だとは思ひもしなかった。認識を改める必要があるそうさ。新たな発見があったということは、ここに辿り着いたのも何かの縁なのかもしれない。そう思うことにしよう。

さすがにこの《境界散歩》を続けるのも億劫になってきた。

変わらない景色。

変わらない静寂。

苦痛でしかない。まるで拷問のようさ。太陽の存在が唯一の救いといったところか。しかしそんなもの、あまりの当たり前さにありがたみもあまり感じない。これは問題発言であるのだが、まあ、誰の目にも触れないだろうから問題無いに違いない。仮に誰かが目を通したとしても、「戯れ言だ」と一蹴してもらって構わない。これも杞憂なのだろうが。とにかく、何も無いのだ。歩くのも疲れてきた。肉体的にはまだまだ余裕だが、精神的な疲れが大きい。この黒い線を飛び越えれば何かが変わるのかもしれない。変わらないのかもしれない。けれど、きつと変わるのだろう。延々と何も無い世界を分断しているのだ。無意味な方が有り得ないだろう。

飛び越えてしまおうか。

そんな欲求が私の心に生まれた。しかし、それをして何が起こるか分からない以上、軽率な真似はできない。もしかしたら、私の命に関わるようなことが起こる可能性も、全くの零というわけではないのだから。旅先で死ぬのは本望。だが、こんな誰も知らないような場所で死ぬのは勘弁願いたい。せめて、誰かに死の直前でも、死後でも私の姿を見ていて欲しいのである。怖いのである。私は始め

て、《場所》に恐怖しているのである。

努めて冷静に、今の私の状況を把握してみよう。何度も述べているように、何も無い、太陽と謎の黒い線だけが存在する場所。延々と続く黒い線。見渡す限り純白の世界。一筋の黒い線が、唯一のアクセントである。何度でも言おう。何も、何も。何もないのである。どうだろう、いつそのことこの黒い線を飛び越えてしまおうか。これは先ほど私が却下した選択肢であるが、しかし、中々どうしていい案であるとは思わないだろうか。

否。否々。とんでもない。どうしようもない愚策である。思いつかなかったほうが建設的だ。ならばどうする。そんなものは決まっている。飛び越えない。絶対に飛び越えない。天と地が入れ替わるという、身の毛もよだつ天変地異が起きたところで、私はこの黒い線を飛び越えない。これは絶対の制約だ。私は決して、金輪際、破ることはないだろう。

ふと、何となく、本当に何となく、私は黒い線と対峙した。《境界散歩》を始めてから初めての行動だった。しかし、あの絶対の制約の存在もあるし、私はもとよりこの黒い線を飛び越えようという気は一切ない。私はこの空白の世界に少々ばかりの戦慄を覚えながら、その黒い線との対峙を止めた。意味のある行動には全く思えなかった。もしかしたら、私がこれを飛び越えることで、何かに気付けたかもしれないのだが、しかし、そんなことどうでもいい。どうでもいいのである。

私は黒い線から少し離れ、その線を眺めるような形で座った。初めて地面に手をついたが、その手触りはザラザラとしていた。安っぽい再生紙のような手触りである。もつとも、これが世界である以上、そんなことは有り得ないのだけれど。否。そんなわけではない。私は硝子でできた町を知っているし、土でできた町も知っている。もしかしたら、紙でできた町も案外普通なのかもしれない。思った

だけで、やはりそれが事実だとは認めたくないけれど。

結局、私には何もやることはなくなつた。立ち上がることすら億劫に思えてくる。旅人あるまじき思考であるが、こんな空間に閉じ込められてはそうなつても致し方ないことではないだろうか。私は仕方がないと思う。自分を弁護しよう。

考えるのを止めて、一体どれほどの時間が経つただろう。最早、睡眠をとつた回数すら数えてはいない。

私は行動を止めた。

世界は活動を止めない。

3 本目

私は正直、そこに辿り着いたことを後悔した。人の姿など見えず、まるで自分ひとりが世界から孤立したかのような錯覚にとらわれてしまったからだ。いや、もしこの時、植物でも見つけていたとするのなら、私はそんな気持ちにはならなかったのに違いない。

ともあれ、辿り着いてしまったからには仕方がない。冒険者であり、旅人である私だ。ここのことを知りたい。

否、本当に私はここのことが知りたいのだろうか？ そもそも、ここには何もないのである。大地に起伏すらないこの世界の一体何を知りたいというのか。そうだ。きっと私は、知りたいという感情を持つことによって、あまりに絶望的なこの状況を楽しもうとしているに違いが無い。しかし、こうしてそれを自覚してしまった今、楽しむという気は完全に失せてしまった。

しかし、だからといって、この場所からの脱出を諦めてしまっているわけでも、ここで死ぬことを認めているわけでもない。私はこの世界から脱出し、次の世界へと旅立つつもりである。つまり、今は行動のときなのだ。

深呼吸をして、この世界を見渡してみる。やはり、最初の印象と同じく、何にもない、真新しい紙の上に立っているような感覚である。空には申し訳程度に太陽が輝き、それ以外には何も無い。しかし、ここが世界として成立している以上、何かしらのものはあるはずだ。太陽だけというそんなことは有り得ない。大地に起伏が無いのは、きっとその何かを見つけやすくする為の、この世界からの配慮である。

と。

私はこの真新しい紙のような真っ白の世界に、一本、真っ黒の線を見つけた。これを一体何に例えようか。

第一に思い浮かぶのが、墨である。が、少し違うのである。あの

ような味わいのある黒ではない。この黒い線は、もつともつと、深く暗い。

次に思い浮かんだのは、鳥である。しかし、それも若干違つのである。この一本の黒い線は、あのような美しい黒ではない。もつともつと、黒なのである。

やっと、それらしいものを思い浮かべることができた。夜である。真夜中の、何の光源の無い空間。一寸先すら見ることも難しいような暗闇である。それでいて、吸い込まれそうな、そんな黒である。そして、そんな黒い線は、まるで世界を分断するかのごとく、そこに存在していた。凄い存在感を放っている。この世界の支配者であるかのような存在感である。そして、この黒い線は地平線の向こうへと続いているようだ。

ともあれ、私はその黒い線に沿って歩くことにした。その線を越える勇気がわかなかつたのである。もしかしたら、その黒い線を越えることにより、次なる世界へ旅立てたのかもしれない。が、私にはその勇気が無い。よって、この線に沿って歩くという、妥協案に達したのである。しかし、いくら歩こうとも、全く変化はなかつた。無限に続く完全なる平野。無限に続く黒い線。申し訳程度の太陽。私の心は退屈に侵食されていた。

変化が訪れた　　という表記を、私は早くしたいと思う。が、中々その変化が訪れない。この世界は一体何なのだ。《無》こそ、この世界の姿であるというのか。否、否々、有り得ない。否、有り得るのかもしれない。何かが存在することが世界の定義なのでは決して無いのだから。それに、たとえそうでなかったとしても、私はここに存在している。存在しているのである。ならば、ここはやはり、立派な世界なのだろう。

さてさて、それにしてもどうしたものであるう。私はずっと休むことも無くこの《境界散歩》を続けているものの、成果は全く上がっていない。完全に骨折り損である。利益はくたびれだけだ。もし、この場に旅の友がいたならば、私はそれでも気が楽であったのだら

う。それでもし、その友が女性であつたならば、私はさらに頑張る気になつたのだろう。が、私は一人で、旅の友はいない。私だけである。否、それはいい。いいのである。問題なのは、この世界に全く生物が存在しないことである。これでは私が生きることができない。今はまだ体力に余裕があるが、徐々にその体力を失つていくのだろう。最終的にはこの世界で一人朽ちることになる。それはご免である。私はまだまだ旅を続けたいのである。

そこでふと、私はさつきと景色が変化をしていないことを改めて自覚した。無論、さつきから分かつていたことではある。が、こうして完全に自覚してしまつては、あたかも自分が前に進んでいないかのような感覚に囚われてしまう。相対性理論を自分のもつて体験してしまつたではないか。否、それはいい。いいのである。問題なのは、この変化に乏しい、否、変化の無い世界である。私はこれっぽつちも悪くは無い。

否。

この世界に踏み入つたのが愚かであつた。実に愚かしい。思えばつたか。この世界に踏み入る前、私は誰かに止められたのではなかつたか。

否。

それはない。絶対にない。だが、心の中では止めておいたほうが良いと、確かに思つていたはずである。が、旅人というこの職業上、私は未知を嫌うのだ。知りたい。この世界を知りたい。知らない世界が怖い。怖いから知りたい。知りたい。知りたい。知りたい。

いわば職業病という私のある種強迫観念的なこの思いが、私をこの地に足を踏み入れさせたのだ。だが、今となつてはそれこそ自分の愚かさを嘆くことよりも、この黒い線について考えるほうがよっぽど建設的である。

考えるという行為に、私は幾許かの疑問を覚え始めた。というのは、果たして私が今考えているとこの現実、果たして私をこの状況から脱するに至らせるかということである。無論、全くの考

え無しではそれは無理だろう。が、こうして理屈ばかりに重きを置き、本質を見抜こうとしない思案は結局、考え無しなのと大差ないのではないか。そう思うのである。

《境界散歩》を続ける私。しかし、それに一体何の意味があるのだろうか。もうこの線の先に何も無いことは明白である。というよりも、この地に辿り着いたときから、地平線の向こうにすら何の影も無いのである。変化が起こりうるはずが無い。完全に体力の無駄使いである。

黒い線。私を大いに惑わせたこの黒い線はきつと、境界線ですらないのだろう。この世界を構成する要素の一つに過ぎないはずだ。ならば、これは《境界散歩》ではない。ただの散歩である。つまり、私はこの黒い線に沿って歩く必要も無い。全く持つて必要ないのだ。

黒い線と対峙する。この線を越えるということに、最早勇氣は必要ない。覚悟も必要ない。ないはずなのだが、ただ、一抹の不安を覚えるのだ。一体何に対する不安なのか、それは曖昧模糊として分からないが、ただ、何となく不安なのである。もしかしたら、それがこの世界の思惑なのかもしれない。この世界から脱することを、それによって拒んでいるのかもしれない。

しかし、私は世界なんぞに屈したりはしない。私の歩みを止められるものならとめてみるがいい。私は この線を越え、更に向こうの世界へと旅立とう。

私はその黒い線を跨いで超えた。

世界が 地平の果てから崩壊を始めた。

まだまだ終わらない。(前書き)

最終話です。

もともと三本目と同時投稿予定だったので、話はとてとてもとても短いです。

まだまだ終わらない。

一人の男が診療所のベッドで横になっていた。かけられたシーツは掛けられた時のままで、男が動いたようなシワは一切入っていない。

男がこの診療所に運び込まれたのは数日前だった。村を囲う柵の門の前で倒れていたのを村人が抱えて運んできたのだ。男はその日から一切目を覚ましていない。ただ、毎日表情が変化する。朝から夜になるにつれ、だんだんと疲れたような表情を見せるのだ。そして次の日は決まって穏やかな表情になる。否、一度だけ、その日だけは一日のうちに表情が急変した。朝はやはり穏やかな表情だったが、すぐに疲れ果てた表情に変化していた。夜には完全に精気を失っていた。

診療所の人間はこの男を見るたびに、旅人であるのだろうと考える。

そして、目を覚まさぬ今も旅を続けているのだろう、とも。

まだまだ終わらない。(後書き)

ご愛読、ありがとうございました。

あとがき。(前書き)

本編ではありません。

あとがきです。

完結しているのに完結設定にするのを忘れていたので、その処理のための投稿です。

一応、本作についてのことを書いていますので、興味があれば。

あとがき。

と言っても、特に書くことはないですね。

一つ一つの短編に、一つずつのメッセーj性を込めたつもりです。

『一本目』がフラッシュの文章化、移行がオリジナルというかなんというか、そういう派生作品になっています。

楽しんでいただけたでしょうか。

終話のタイトルは終わりの始まり的な意味でつけたのに、そのままの意味になってしまってなんだか残念な結果になってしまいました。そもそもこういう形式で1話を消費してはいけないような気もしますが、完結しているのに連載中になっているのもなんだか誠意にかけるような気がします。

ので、こういう形式で完結とさせていただきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4507/>

境界散歩

2010年12月8日16時25分発行